



連載第 138 回

「アニマルウェルフェア畜産」の今(その6)
——現場に学ぶフォーラムの報告から——

牛や豚、鶏などが生まれてから死を迎えるまでの間、ストレスのない環境で健康的に飼養する——というのがアニマルウェルフェア(家畜福祉)の基本的な考え方。1月31日、「現場の今」から家畜福祉の未来を探る」をテーマにしたフォーラムが札幌市内で開かれた。主催したのは昨年設立された「北海道・農業と動物福祉の研究会」(代表・瀬尾哲也帯広畜産大学講師)。ベテランの臨床獣医師とチーズ工房も営む酪農家、放牧養豚を手がけるレストラン経営者が、それぞれの実践をもとに報告を行ない、参加者とのやり取りなどを通して今後の方向を探った。一昨年から随時掲載してきた家畜福祉シリーズの第6回は、3つの報告を中心に紹介する。



▲「北海道・農業と動物福祉の研究会」の屠畜場見学会で、職員たちを囲んでやり取り(昨年11月21日、帯広市内で)

◀旭川市の「クリームー農夢」の見学会では、製造された牛乳の試飲も(昨年6月7日)

いま、日本ならではの「家畜福祉」を 獣医師、生産者の貴重な経験に注目

昨年5月に研究会を設立
見学や認証制度の学習会も

1970年代以降、酪農・畜産の規模拡大が急速に進んだ。その結果、多くの畜産製品が食卓に上るようになり、消費生活に物質的な充足を与えてきた反面、生産性の向上に偏重した家畜改良や効率優先の飼養管理などによって、畜産動物に苦痛を強

いている実態がある。

日本政府も加盟するOIE(世界動物保健機関)による国際的な家畜福祉基準の作成作業が進む。国内でも、農林水産省が「飼養管理指針を策定したり、(公益社団法人)畜産技術協会がアニマルウェルフェアの評価法をまとめるなどの動きがある。しかし、家畜福祉の認知度はまだまだ低く、国内外の動きは関係者

外に伝わっていない。

そんな状況に一石を投じ、家畜福祉について学ぶなかで、今後の方向性を提案していこう——と、昨年5月に発足したのがフォーラムを主催した「北海道・農業と動物福祉の研究会」だ。現在のメンバーは、道内の畜産農家や獣医師、研究者、会社員、消費者・動物保護団体の会員ら37人。わたしは同研究会の事務局を

担当している。

研究会はこれまで、ストレスのない環境で数頭の乳牛を飼い、牛乳・乳製品の製造や販売も手がける旭川市の「クリームー農夢」や、帯広市内にある屠畜場の見学会などを実施してきた。また、EU(欧州連合)加盟国やアメリカなどで盛んな、アニマルウェルフェア畜産製品を認証・販売する



「現場の今」から家畜福祉の未来を探る

第2回アニマルウェルフェア畜産フォーラム



「現場の今」から家畜福祉の未来を探る」をテーマにしたフォーラムでは、獣医師と酪農家、レストラン経営者の3人が報告を行ない、参加者との質疑などを通してアニマルウェルフェア畜産の可能性を考えた。東京や宮城から参加した人もおり、少しずつ関心が広がっている

(1月31日、北海道クリスチャンセンターで)

取り組みなどについて勉強会も続けてきた。将来的には、家畜福祉に適った畜産を実践する農場や、そこで生産される牛乳や肉、卵などを使った製品を独自に認証していくシステムの構築をめざしている。

「畜産現場の今」から学び 北海道で取り組みを広げる

家畜福祉の考え方を普及するときには、畜産の現場について知ることが今回のフォーラムの主旨。約50人の参加者のなかには、さまざまな形で畜産に関わる人が目立った。基調講演を行なった岡井健さんは、根室地方で長く農業共済組合に勤務した経験を持つ、半世紀近く乳牛の診療を続けるベテラン獣医師。「酪農は家畜福祉の概念を最も受け入れやすい飼養形態」と前置きして、北海道酪農の変遷について語った。

80年代以降、大量の輸入穀物を与えて高泌乳化が進んだ。その結果、牛の第4胃変位や脂肪肝などの疾病が増えてきた実態を示す一方で、適正規模を守って健全経営を続ける酪農家がいることを紹介。これまでの家畜福祉の考え方に加え、飼養頭数や穀物給与の上限を設けたり、牛に

やさしい飼い方をする酪農家の乳価を高くするよう提案した。

現場からの報告では、十勝で酪農やチーズ工房を営む半田司さん(大樹町在住)と、千頭規模の放牧養豚に取り組んでいる平林英明さん(帯広市在住)が語った。

10人のスタッフで150頭規模の牧場を切り盛りする半田さんは、40年前に自作したフリーストール牛舎の欠点を改善してきた経緯を紹介。パドック(運動場)での放牧や敷料・排水設備、排水処理などの取り組みを通じた、半田ファームが考える家畜福祉について語った。

70年代に米国で放牧養豚を体験した平林さんは帰国後、レストランの仕事のかたわら、手作りソーセージなどを製造・販売する。こだわりの肉を求めるなかで放牧養豚に行き着くが、自然のなかで豚を飼うには病気などのリスクも背負った。

それでも放牧をやめないのは、自然な環境でやさしく育てると、豚は良質の食肉の形で応えてくれるからだという。そうした試行錯誤の日々を率直に語ってくれた。

次ページ以降に3つの報告の要旨を掲載したので、ご一読を。

乳牛の疾病から見える アニマルウェルフェア

穀物の飽食で増える内臓疾患

家畜福祉は、西欧の人たちの考え方が中心になっていますが、仏教国の日本では違っていました。家畜を生きとし生けるものと捉え、治療中に牛が死んだりすると一家総出で悲しみ、近所の農家が見舞いに集まりました。農家は家畜を慈しみ、ねぎらい、感謝しました。公共牧場には牛魂碑を設置し、牛舎を建てたばかりの人

も家畜のために碑を建てる——こうした農家は今でも散見されます。

しかし、多頭化・高泌乳化が進み、そうした気持ちも薄くなってきた。大きな転機は80年代の牛肉の輸入自由化です。乳牛の値段が一気に下がり、農家の手取りが減っただけでなく、牛を丁寧に扱わなくなりました。半世紀前に全国に40万戸ほどあった酪農家は今、3万戸を切つていきます。しかし、飼養頭数は変わらず、

乳量は伸びてきました。40年ほど前の泌乳量は年間4千キロ／頭程度ですが、今は8千キロを超え、牛群平均だと1万キロ超が珍しくありません。放牧形態を維持していたら、こうした乳量は稼げないのです。

「北海道牛乳」と名付けた商品のほとんどに放牧風景が描かれています。粗飼料主体で昔の形態の酪農家は全体の5〜10%はいるけれど、頭数が少ないので量的には「北海道牛乳」の2〜3%しかないでしょう。閉塞された空間で飼われる牛が圧倒的に多く、放牧酪農でもさまざまな形で高泌乳を追求しています。

大量に購入する輸入穀物の多くは米国产トウモロコシです。関税がからず、酪農の規模をどんどん大きくする働きをしています。去年は世界の穀物生産量が伸び取引価格も下がってききましたが、アベノミクスで円安になり、餌代はむしろ上がり大きい酪農家は苦しんでいます。

日本では毎年、約4千万トンの穀物を消費し、うち輸入分が3千万トン弱を占めます。人の消費量は3分の1程度で、残りは家畜が食べる。大規模化による高生産を支えている

のは、圧倒的な量の輸入穀物です。

牛には4つの胃があり、1〜3胃は食道が変化したものです。4胃だけが人間と同じように消化液を出し、ストレスを受けやすい。4胃が弛緩する「第4胃変位」という病気があり、分娩後の高泌乳牛に多く発生します。僕は学生時代、この病気について習ったことがあります。今は4〜5%が罹っています。

僕はこれまでに2千頭以上の乳牛の腹を切りましたが、衝撃的だったのは分娩直前に消化性の潰瘍で胃に穴が開いていたケース。共済組合時代の最後にいた診療所では、年間800頭くらい開腹手術をしたうち、胃潰瘍の牛が10頭ほどいました。

牛は、泌乳や飼養管理、飼料、環境変化によるストレスを受けています。それを第4胃変位という形で表し、時には胃潰瘍になったり、突然死する牛もいる。こうした病気は餌をやりすぎたために起きるのではないかと考えます。

家畜福祉では「動物を飢餓から救いなさい」と言うけれど、近代酪農で牛が飽食になり、多くが脂肪肝に罹っています。体中に貯め込んだ脂肪を肝臓で処理しきれず、オーバー



1943年、東京生まれ。帯広畜産大学卒業。臨床獣医師として根室管内の農業共済組合に勤務し、2004年に退職。岡井家畜診療所を開業して現在に至る。別海町在住。本誌14年1月号に詳細インタビューを掲載

フロアーしてしまうとパンパンに腫れ、黄色く変質してしまうのです。
乳牛の病気のほとんどは分娩後に起きます。ミネラル代謝に起因する起立不能や、脂肪肝などの代謝器病第4胃変位などは、穀物を主体にした十分すぎる飼料の給与に起因するものといえます。高能力牛では、これらのすべてが治り難く、長期で高額な治療をしなければなりません。

土・牛・人にやさしい酪農を

別海町などで(土・草・牛の循環を基本に適性規模で牛を飼う)「マイペース酪農」の集まりが続いています。表は、マイペース型の酪農家8戸と道東あさひ農協の酪農家(同型を含む)などの平均的な数値を比較したものです。草地面積はそう変わらないのに、経産牛の頭数や年間乳量、飼料代、肥料代などに大きな差があることが分かります。



消化性の潰瘍で胃に穴が開いた乳牛の事例

て、本当にかわいそうです。

大きいところは事故による淘汰率が10%を超えるけれど、マイペース型は5%ほど。僕が行っている農家の年間診療代は23万円です、獣医さんは儲かりません。一方、大きな酪農家は5%くらいの牛に第4胃変位が起き、治療すると1頭あたり8万円ほどが共済組合の収入になります。共済の収入の半分くらいは開腹手術によるものでした。

大きなフリーストール牛舎では、糞尿はきちんと処理され、外には牛

が全然出ていません。配合飼料と草と一緒に混ぜて作るTMR(混合飼料)を与え、フリーストール&ミルキングパーラー(注)搾乳のための施設)でやるとたくさん飼える。でも、牛は平均2・5産くらいしか持ちません。マイペース型の人たちは、その何倍もの期間飼っています。

人間や土地にも無理をしなければ牛は健康になり、きちんと応えてくれる。生産量は上がらないけれど、経費が少なく済み、健全な牛乳を消費者に提供することができます。

家畜福祉へ3つの提言

今年も国際土壌年です。健全な土壌は食の安全と環境に欠かせない根源的なもの。動物だけに一極化してただ可愛がるんじゃなくて、土壌にも、草にも、酪農家にも、生きものにもやさしく無理がない——そうしたものをつくるのが本来の家畜福祉ではないでしょうか。これまでの考え方だけではない、と思います。

根拠マイペース型酪農家と道南放牧グループとA農協の経営比較 (2013年度)

	マイペース8戸平均	道南放牧10戸	A農協平均
草地面積	61ha	38ha	78ha
経産牛頭数	45頭	29頭	83頭
出荷乳量	276t	197t	606t
乳代(補給金含)	2,306万円	1,702万円	5,172万円
個体販売	403万円	329万円	523万円
その他収入	283万円	187万円	713万円
農業収入合計	2,982万円	2,218万円	6,408万円
購入飼料代	497万円	374万円	2,134万円
購入肥料代	123万円	20万円	256万円
支払利息	12万円	15万円	63万円
その他支出	1,045万円	790万円	2,419万円
農業支出合計	1,676万円	1,199万円	4,872万円
農業所得	1,306万円	1,019万円	1,536万円
農業所得率	43.8%	45.9%	24.0%
資金返済	139万円	203万円	480万円
資金返済後所得	1,167万円	816万円	1,056万円
乳飼比	21.6%	22.0%	41.3%
1頭当たり乳量	6,081 kg	6,793kg	7,281kg

病院では医者数の数によってベッド数を決めますが、それと同じように頭数の上限を設けてはどうか。「成人男子1人あたり30頭搾乳くらいを飼育の上限にする」を提案したい。

2番目は、穀物給与量の上限を設ける。「平均3トン/年くらい与えているのを1トン以下にすることです。世界的な穀物価格を下げ、飢餓を解決する方向につながります。」

また、家畜福祉の評価基準に3〜5段階のグレードをつくり、「乳価に差をつけて酪農家を支援すること」も必要だと考えます。

半田ファームの考える アニマルウェルフェア

快適な牛舎へ試行錯誤

わたしの牧場は、全部放牧でやっているわけではありません。パドック(注)牛舎に付設した運動場)の状態に近く、土を踏んで自由に動けるといった意味合いのほうが強いものです。

乾乳牛で1ヘクタール、搾乳牛は3ヘクタールほどの広さがあり、自由(注)牧草を置く設備)まで



1949年、大樹町生まれ。酪農学園短期大学を卒業後、雄武町で人工授精師歴が8年。78年にUターン就農し、酪農業に従事。96年からチーズ製造も手がける。大樹町在住

行けます。妊娠初〜末期の育成牛用は1ヘクタールほどで、(牛舎側の)カウンタースロープのほうから自由に動けるようにしています。パドックのまわりは林です。

フリーストール牛舎は40年前に自分たちですべて手作りしました。当時はまだ、この方式を採用するのは珍しかったのです。ミルクングパーラーの能力は、1時間に35〜40頭搾乳で、1頭あたり20〜25キロ/日くらいの乳量で設計しています。

牛舎の欠点はたくさんありました。コンクリートの通路には溝が掘っていないので滑り、「どう乗り越えるか」をめぐって議論したものでなく、人間と牛との距離感が少なくなっている、と感じます。

通路で牛が転んで立てなくなるのは、前兆がある。それを見ている人間側に問題があるわけで、牛に悪

いことをしていることになります。

その後、できるだけ棟を高くして牛が寝られるようにしました。餌箱と通路、寝るところの位置関係を変え、牛にも人間にとつてもいいシステムにしています。

「人間の福祉」も必要では

家畜福祉に対し、ヒューマンウェルフェア(人間の福祉)も必要だと思っています。

ミルクングパーラーは冬の間、できるだけ水洗いしないようにしています。排水を浄化しており、糞尿のスカム(浮き滓)が入ると容量が増えポンプで送れなくなるので、スコップで片付け終わりにします。

(パーラーは)人間が動くところがフラットになっていて、牛は一段高いところに入ります。施設を造った当時は、パーラーから牛が落ちる夢をよく見ました。実際には、初産の牛もいますが、前の牛をちゃんと見て、スムーズに入ってきます。

(給水などのための)水槽は電気を一切使わず、地熱を使って年間凍らないようにしています。コストは少し高いけれど、何10年経っても壊れません。今後は方式を変え、牛舎の外



冬の半田ファームのチーズ工房(1階部分)と直売店(2階)

にもう1〜2カ所(飲水設備を)設置する予定です。パーラーの排水は浄化槽できれいにしています。

毎日(冬場は)朝4時から除雪をして、5時から5時半に搾乳が始まり、同時に生乳をチーズ工房に送ります。(生乳の移送は)物理的な特性を失わないように自然流下方式を採用してきました。午前8時から生乳の殺菌が終わり、乳酸菌の培養をして、牛舎の仕事も終わるといふ流れです。

(チーズ製造の過程で出てくる)ホエー(乳清)をタンクに戻しておく、地元豚屋さんが取りに来て、ホエーを買ってくれます。それを飲んだブーちゃんが「ホエー豚」として、食肉などに加工し、製品化されています。

エルパン牧場の

放牧養豚

病気などリスクもあるが…

「放牧養豚で健康な豚が育つ」と皆さんは想像されるでしょうが、現実には多くのリスクを背負います。たとえば、豚丹毒という病気が3年前から発生し、1カ月に廃棄する豚が14頭になった時期もあります。自然な状態で飼うことと、どうしたら病気を避けられるか——そこにジレンマを抱えています。でも、僕には「こ

うやって豚を飼いたい」という強い思いがありました。

うちの牧場は繁殖はやっていません。生後18日の子豚を180頭ずつ購入し、3段階に分けて生後110日まで小屋飼ひします。1頭あたり飼育面積は0・4〜1・8平方メートルと、一般の豚よりかなり広くしてある。その後、放牧します。

密飼いとすると豚にストレスがたまり、尻尾のかじり合いが始まる。うちの豚はすべて尻尾がついています。移動時期を間違えると尻尾をかじる現象が起きたりします。

30ヘクタールの牧場では、生後7カ月以前と以後の2グループに分け、600〜700頭ほど飼っています。生後8カ月で出荷しますが、集荷時には一切、電気のみちで追いかけてりしません。丘の上は見晴らしが良く、豚はともりラックスして騒がない。臭いもせず、豚にとって良い

環境ではないか。だんだんアニマルウェルフェアらしくなっています。

高品質の豚肉を追求する

一般の養豚場より2カ月長く飼うので、うちの豚は枝肉で130キロと、よそよりも倍近い大きさになります。脂の厚さが3〜4センチになるため、市場では安い値段でしか売れません。そこで、自分でお客さんを見つけて販売してきました。東京や大阪には外国経験のあるシェフがたくさんいて、僕の放牧豚に興味を持ってくれます。

その良さを証明するため最近、東京のメーカーから食肉中のオレインの測定器を導入しました。牛肉の世界では近年、脂肪酸の含有量によってプレミアムを付けた肉をつくる動きが始まっています。うちの豚肉を測ってみると、オレイン酸の含量50という高い数値も出ました。

僕は、広い牧場に豚を放しただけで、特別なことはしていません。餌も普通の配合飼料を使う。違うのは2カ月ほど長く飼育していることです。豚はもともと美味しいものだからにも係わらず、人間の都合で決めた基準で出荷している。本当は脂が




ハウレンソウを食べるエルパン牧場の豚たち

乗るまで育てないと美味しいお肉にはならないのです。

これは、動物にやさしい飼ひ方をすることで、豚がちゃんと返してくれる良い例でしょう。アニマルウェルフェアを認知してもらい、少しでも高く売りたいのは正直な話ですが、こうした飼ひ方で豚の肉質が変わることが確かならば、多くの人がやりたいと思うのではないかと。

また、放牧をすることで生産者の負担も少なくなります。汚い、臭いという作業もほとんどありません。動物とともに生きる実感を味わえる——負担が少なく、いいものができる——その両方があると、誰にでもアニマルウェルフェアの必要性を説得できるのではないのでしょうか。



1945年、帯広市生まれ。米国で放牧養豚を経験後、71年に帯広でレストラン「ランチョ・エルパン」を開業。10年前から放牧養豚を実践する一方、「どろぶた」のブランドで食肉加工や販売も。帯広市在住

※筆者のHP「滝川康治の見聞録」takikawa.essay.jp/ に本シリーズの過去記事を収録しています。ご参照ください。